分科会　テーマ２　イスラム圏の留学生に対する受け入れ体制。
司会　佐藤友則（信州大学）　記録　西谷まり（一橋大学）
話題提供　藤井桂子（横浜国立大学）、高橋志野（愛媛大学）

藤井

横浜国立大学にはムスリム学生が全留学生の 1 割程度の 80 人ぐらい。

学内のムスリムグループの活動、生協食堂のハラルメニューの導入、一般学生の理解を深める冊子の発行などについて情報提供があった。

高橋

愛媛大学のムスリム学生は全留学生の 22．3%の 72 人。学内の施設提供、生協食堂でのハラルフードの提供、親睦団体の紹介があった。

生協食堂のハラルメニューは、採算性から種類が増やせないので、日本人学生にも食べてほしいという意見と、日本人学生が食べると必要な人にいきわたらないのではというジレンマがある。留学生は生協の会員になっていないのでサービスができないという大学もあった。

お祈りの部屋については、大学側は「祈りの場」という提供の仕方はできないのが、ほぼすべての国立大学のようである。留学生のコミュニティスペースという提供の仕方が多い。

海外の大学では、ムスリム対応が大学の宣伝材料の一つになっている場合もある、学長とじかに話せる関係、大学の外の団体との連携など、さまざまな事例が紹介された。

元留学生がハラルフードの店やレストランを大学近隣に開くという事例もあるとのことである。

今後、150 人のシリア難民を 30 人ずつ 5 年間、国費留学生として受け入れるという計画についても文化庁から言及があった。